
拉致監禁、愛故に解禁

太郎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拉致監禁、愛故に解禁

【Z-ONEデジタル】

Z9331-A

【作者名】

太郎鉄

【あらすじ】

少年しか愛せないマコミさんにて、僕が拉致監禁されてから三年が経つ。足を切断されていた僕の楽しみは、マコミさんを虐める事だけ。監禁されているのは僕なのに、憔悴しきっているのはマコミさん。そんな僕とマコミさんの関係は、やがて…。

(前書き)

ホラーなのが自分でもよく解りませんが、読者様の暇つぶしに少しでも役立てたら、この上なく嬉しいです。

僕がこの部屋で監禁されてから、もうすぐ三年が経とうとしている。

しかし、一体ここは何処なのだらうか。三年も経つのだから、そろそろ教えてくれてもいいじゃないですかとマコちゃんに尋ねてみる。

「神奈川県のとあるマンションよ。それで充分でしょう」

多分、結構高い階層なんだと思つ。窓から見えるのは海と街と島。島からはジエットコースターがはみ出している。

神奈川県という事は、きっとあれがシーパラダイスなんだらうな、と、僕は三年前にして初めて気付いた。

「場所が解つたつて、君の運命は変わらないわ。助けが呼べるとでも思つてる？無理よ。一生君は私だけのものだから」

「マユミさんも頼たづねたついでにそう言つた。僕はテーブルの上からリモコンを取るのに苦労した後、テレビをつけた。

行方不明者をテレビを通して探し出すところ趣向の番組が放送されていた。

今日は僕の両親が出演しているのだ。

『…続いて、三年前に行方不明になった、山岸拓真君のこの両親かの心の声です』

アナウンサーがそう告げる。画面が僕の実家の外観に切り替わった。懐かしい。僕が昔悪戯で書いた塀の落書きも、沖縄好きの父さんが玄関の門の左右に設置したシーサーも、まったく変わりず、そこにきちんと存在していた。

続いてリビング。畳の狭い部屋に、父ちゃんと母ちゃんと姉さんが神妙な面持ちで正座していた。

父ちゃん——元々薄かつた髪の毛が、さらに円形に脱毛していた。
母ちゃん——皺の数が信じられない程増えていた。

姉さん——化粧が上手くなっていた。黒かつた髪の毛は金色に光り、ウェーブがかかっている。

父ちゃんと母さんが、僕に対して訴えかけた。家出なら帰ってきてくれ——。誘拐なら犯人さん、息子を返してやつてくれ——。

そこでテレビ画面がプリリとつづ音と共に消えてしまつ。

「見ても無駄よ。あなたもいい加減そんなものに縋るのはよした
ら?」

マコリさんがリモコンを放つて、呑みしそうに僕を睨んだ。

「そうですね」

僕は無表情で答えた。もう随分前から、僕には表情といつものが消えてしまったのだ。

「帰るのは朝になるわ。何か欲しいものはある?」

「強いて言つなら、足を返して欲しいですね」

マコミさんはわかりやすく動搖した。怯えた兎のように、許しを乞ひ田で僕を見た後、足早に部屋を出ていった。慌ててしまった。

近頃では、これだけが僕の楽しみだ。マコミさんは昔から、冷徹や残酷に徹しきれるタイプの人間ではない。努めて僕の前ではそういう風に振る舞つてはいるが、少しばかり罪悪感を刺激してやると、すぐに本質を露呈する。

それが滑稽で面白くて、ストレス発散に利用させてもらっている。さて、マコミさんが帰つてくるまで何をしよう。僕は車椅子を器用に動かしながら、マコミさんにに対する嫌がらせに頭を捻つた。

こつものよつて、部屋を全力で荒らしてやるべきか。しかしそれもやひそろ飽きてきた。

僕はマコミさんの部屋に入り、本棚からアルバムを取り出す。マコミさんの『宝物』だ。

ページをめくると、そこには全裸の少年の死体写真でびっしりと埋め尽くされている。

皆、マコミさんに殺された。正確に言えば殺害したのはマコミさん本人ではないのだが……。

マコミさんは少年しか愛せない性癖を持つてゐる。もう四十を過

あるところの、その性癖は改善されるが、さらに大きな欲望へと進化を遂げているのだ。

少年しか愛せないマコミさん、少年に愛されたいのである。だから沢山の少年をわざつて、それを強要しようとしたのだ。

マコミさんが愚かなのは、いちいち少年が逃げないよつて、足を付け根から切断してしまう事だった。そのせいに少年の精神は決壊し、愛すどころか、単なる心のない人形になつて、結果、殺すしか方法がなくなる。

そんなマコミさんが、最後に手に入れたのが僕だった。足を切断されても、なんら平静でいられる僕を、マコミさんは溺愛している。
『世界で一番あなたを愛している。だからあなたも世界で一番私を愛して』

口癖のよひにマコミさんは言つ。全裸で僕に跨りながら、馬鹿みたいに腰を振つて。

僕はその度に、マコミさんに囁く。

『僕は世界で一番あなたを憎んでいます。体も心も醜悪極まりないあなたを。あなたは誰からも愛されませんよ』

マコミさんは泣き喚いて腰を振る。僕は今年で十一歳になるが、一度も射精した事がなかつた。多分、これから先もする事はないだろ。マコミさんといふ限り、僕が性欲に目覚める事はない。

朝になつて、マコリさんのが帰ってきた。疲れた顔をしている。マコリさんは医学に携わる職業に就いているらしいが、恐らく昨晩は大変な手術でもあつたのだろう。

コンビングに戻ると、マコリさんが叫び声をあげた。

テーブルの上に、僕がカッターで切り刻んだ少年の写真が燐々している。

マコリさんは慌ててそれを拾い集め、パズルを組み合わせようと、修復を試みていた。

やがて、あまりに細かく刻まれたその修復が不可能だと語ると、一筋の涙を流して、僕に呟いた。

「どうして…」

僕は相変わらず無表情に答える。

「どうして、それはこいつのセリフですよ。マコリさんは僕を愛してこんな感じ? だったら他の子供の写真が失われたらいいで、どうしてそんなに悲しむんです?」

マコリさんは俯き、その後立ち上がりて部屋に籠もった。

玄関の前には、マコリさんが僕を逃がさない為に設置した鉄柵の扉がある。どうやら今日、心労の為か、マコリさんは南京錠をかけ忘れたようだ。

今なら逃げる事が出来る。

しかし、僕が逃げるのはまだ先の話だ。別に逃げる事はいつでも出来る。どうせなら、マコリカミをもつと壊してから逃げよう。

さらに一年が過ぎた。僕は本来なら中学に進学する年齢になつている。

テレビをつけないと、去年から引き続き、例の番組で僕の両親が訴えかけていた。

その後で僕の紹介。成績優秀、周囲からは神童とまで呼ばれていた少年の謎の失踪から四年。いまだに少年の足跡や痕跡は発見されていません。視聴者の皆様からの情報をお待ちしておりますーー。

最後の田撲者として、姉さんの証言がテロップと共に流れ。

「私が試験を終えて、高校から帰宅すると、弟は友達と遊びに行くと言つて家を出たんです。あの時、止めていれば…」

父さんの胸に泣きつく姉さん。姉さんを抱きしめる父さん。隣でハンカチに顔を埋める母さん。

そこでテレビが消える。

「もう、いいでしょ、忘れて私との生活を楽しみましょ、

マコリカミの一年で大分やつれていた。頬がこけ、髪の毛も徐々にだが白が浸食し始めている。

「マコリさん、が両親の出演しているテレビを消すのは、僕に見せたくない」と、うつむく。自分が見たくないからだ。

まつたく、マコリさんという人間は矛盾に満ちている。マコリさんは僕の両親の気持ちをかなりダイレクトに知っているのだ。両親に申し訳ないという気持ちがありながら、それでも僕を手放さたくない。僕はまだ子供だから、愛という概念について詳しくないが、それはどうやら、人を迷走させるものなんだろうなと悟る。

「どうして、あなたは私を虐めるの？」

「マコリさんが僕に抱きついてくる。声は掠れていた。

「私はここの、あなたの事を愛しているの」
大分マコリさんの体重は軽くなつた。拉致監禁されているのは僕なのに、憔悴しているのはマコリさんの方なのだ。

僕はマコリさんの背中に手を回した。マコリさんの体が僅かに震える。

「マコリさん、大分小さくなつちやつたんですね。僕が虐めたがりますか？」

精一杯優しい声で、僕はマコリさんの耳元に囁く。

マコリさんはそんな僕の声に驚いて、僕の肩を掴み、顔を覗きこんできた。その表情は明らかに困惑している。

「こんな事をされて、僕があなたを憎むのは当然だと思いませんか？僕はあなたに色々なものを奪われた。両親と過ごす生活も、歩

くといふ行動をえも。だから、僕もあなたから何かを奪いたかった。
そんな想いが、僕があなたを虐める動機に繋がってしまったんです

マコリさんとの日から、止めどない涙がこぼれる。僕はマコリ
さんの頭を、赤ん坊をあやすように撫でてやった。

「でもね、最近、マコリさんが痩せ細つてこのへを見ると、変な
気持ちになるんです。マコリさんを憎んでこら篠なのに、なんだか
とても申し訳ないっていうか、可哀相っていうか、そういう気持ち
に。何ででしょう、もしかしたら、一緒に生活している内に、僕も
マコリさんの事を愛してしまったのかもしれませんね」

マコリさんはわんわん泣いた。赤ん坊のようになると、それ
はもう赤ん坊だった。

「『めんね、『めんね…』

マコリさんは恐らしく、僕だけではなく、自分が殺してしまった少
年達に対しても謝罪しているんだと思った。

「もう、ここりすよ

僕はマコリさんを強く抱き締める。

「愛してこます。マコリさん

マコリさんもキツく僕を抱き締める。その後で、僕に頭を重ね、
舌を絡めてきた。やはり興奮は微塵にもしなかつたが、ひとまず僕
も舌を器用に動かしてみる。

「マコミさんは耐えきれず、全裸になつて、僕の股間に跨つた。僕は勃起もしていないのに、勝手に腰を動かして、勝手にマコミさんは果てて、床で息を乱していた。

「あなたを、じい両親にお返しして、私、自首する事にしたわ」

次の日の朝、マコミさんが僕に叫んだ。

「死刑は免れないだろうけど、もういいの。何よりも大切なものを、あなたから貰つたから、命なんて惜しくないわ」

マコミさんはキッチンで朝食を作つてゐる。つまり、僕からマコミさんは見えない。それでも、マコミさんが泣いているのは解つた。

まったく、大人の癖によく泣く女だと僕は思つ。

「あなたには何をしても償いきれないほど、大変な事をしてしまつたと思ってる。本当にごめんなさい。だけど、最後に一つだけワガママ聞いてくれないかしぃ？」

「何ですか？」

「一日だけ、外でデートして欲しいの。わたし、の、最後の、思い、出で…」

泣き崩れてこくマコミさん。

「いいですよ」

と僕は答える。

「ありがとう」

消え入りそうになってしまった、マコモが言った。

潮の香りが心地よい。四年ぶりの外の日差しが眩しかった。マンションは道路に畠して建つており、道路の向こうにはもう海があった。

マコモさんはお洒落をしていた。今までほとんどしなかった化粧をしつかりと顔に施して、毛皮のコートに身を包み、高級ブランドのバッグを腕に提げている。

僕はマコモさんと車椅子を押しながら、四年振りの景色を存分に堪能していた。

横断歩道で歩みを止める。赤信号。

トランクが彼方から猛スピードで走ってきた。

僕は唐突に車椅子の車輪を轆轤を始めた。横断歩道の真ん中で止まる。

マコモさんの声。

僕の背中に衝撃。マコモは突然飛ばされた。そのまま海の方へ。桶にぶつかって止まる。背後で鈍い音がしたーー。

マコリさんの元へ車椅子を漕いだ。

マコリさん——両手両脚がおかしな方向に曲がっていた。側頭部が欠損して脳みそが垣間見えた。血溜まりの中心で息を切らしていた。

辛うじて、マコリさんは生きていた。

よかつたと、僕は思った。

「大、丈、夫？」

マコリさんの言葉に僕は頷く。

「よみかかた」

最後の力を振り絞り、マコリさんが顔の筋肉を動かして、笑顔を作ろうとしている。

「ああ、あい、あいじ、て、てる、わ

僕はさうしてマコリさんに近寄った。

「ありがとう。だけどマコリさん、僕が本当にあなたの事を愛しているとでも思つたんですか？」

マコリさんの表情——引きつりつりしていた。しかし、もはや引きつるだけの力がマコリさんは残っていなかつた。笑顔と引きつる中間で、マコリさんの表情は極めて不気味なものに変わつた。

「そんな訳ないでしょ。あなたって、本当に馬鹿なんですね」

「ななな、ばば」

「最後のお洒落お疲れ様。ばあがアホみたいな格好するんで、吹き出しあつでしたよ」

僕に久しぶりに表情が戻ってきた。そつ。僕は笑っている。

「バイバイ、マコリさん」

マコリさんの意識が跳ぶのと、僕がマコリさんの頭を車輪で引き潰すのは、どっちが先だったか解らない。

「死んだよ」

「あんたが殺したのね」

「まあね」

「…あのおばさん、本当に使えないんだから」

「だつたら何でマコちゃんの手伝いなんかしたんだい？」

「交換条件よ。おばさんがあんたに惚れてたのは最初から知つてたから、私は最初からあんたをさらえつて言ってたんだけど、あの変なところ拘るから、近親相姦は駄目だつて」

受話器の向こうで舌打ちが聞こえた。

「だから、何人か他のガキさらつて、全員駄目だつたら最後にはあんたをきちんと閉じ込めるつて条件で、私はおばさんを手伝つていただわけ」

「ふうん。随分と回りくどい事をするね」

「当たり前じゃない。本当は私があんたを殺したいところだけど、そんな事がもしバレでもしたら、天才って呼ばれるあんたに、誰よりも期待していた父さんは、私を許してくれないわ」

僕は思わず、吹き出した。

「あんな禿頭のどこがそんなにいいのか？」

「あんたにあの人魅力なんかわかりやしない。私の愛を邪魔しないで。あんたさえいなきや、父さんは私だけを見てくれるんだか

「う」

「それは残念だったね。僕は今から家へ帰るよ

「帰つてきたら、今度こそ私の手であんたを殺すわ

「退屈せずに済みそつだね。楽しみにしてるよ、姉さん」

通話が絶たれた。

子供しか愛せないマコ//さこと、父親しか愛せない姉さん。

愛なんてろくなもんじやないな、と僕は思い、マコ//さとの携帯を海に放り投げた。

足を失つたが、姉さん程度と張り合つ分には、適度なハンデになりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9331a/>

拉致監禁、愛故に解禁

2010年10月11日04時20分発行